

# 対人状況の違いによる自己呈示と対人不安の関係

——女子青年の場合——

万代 ツルエ

## 目 的

我々は日常生活において、様々な出来事や対象に対して不安を経験する。例えば、人前でスピーチで緊張したり、あまりよく知らない人と関わる時にぎこちなさを感じたりするのはよくあることである。このように、人前や対人関係の中で感じる様々な不安を対人不安 (social anxiety) とよぶ。本研究で扱う対人不安は、不安障害の一つである社会恐怖 (social phobia) よりも、我々が日常生活の中で経験する一般的な不安情動である。

Leary (1990) は、対人不安を「現実の、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安」であると定義づけている。また自己呈示理論により、「人に良く思われたいという動機づけに従って自らの行動をコントロールする (自己呈示する) ことができるかどうか疑問を持ち、他者から不満足な対応を得る可能性があると予想した時に不安が生じる」と説明し、対人不安の強さ  $= f[M \times (1-p)]$  と公式化した。M は自己呈示欲求の強さを指し、p は自己呈示の効力感・成功の主観的確率を指すもので、M が高いほど、p が低いほど対人不安が強くなる。自分を良く見せたいという欲求が低いか、あるいは自分を良く見せる自信が強ければ対人不安は生じないという事になる。つまり、「他者に特定の印象を与えようとして動機づけられていること」「他者に特定の印象を与えることができるか疑わしいこと」という二つの変数のうちいずれか、または両方が高まる時に対人不安が深刻化するのである (Leary, 1990)。

### 1. 自己呈示欲求について

菅原 (1986) は、他者からの肯定的な評価を得ようとする欲求を「賞賛獲得欲求」、他者からの否定的な

評価を避けようとする欲求を「拒否回避欲求」として概念化し、これらが異なる因子として抽出できることを明らかにした。さらに、他者に与える自己イメージと両欲求との関係を検討し、「賞賛獲得欲求」が強いほど他者と積極的に関わり他者の関心を引き付けようとする自己顕示的なイメージが強く、「拒否回避欲求」が強いほど平凡で目立たずお人好しいイメージが強いことを見出し、二つの欲求は他者に対してそれぞれ異なった社会的イメージの呈示を促すことを示唆した。以上のことから、それぞれの欲求が異なった方向に対人態度を媒介することを明らかにし、その時々状況や対する相手との関係によって二つの自己呈示のストラテジーを使い分けている可能性を示唆している。

また、佐々木・菅原・丹野 (2001) は社会的不安傾向と賞賛獲得欲求、拒否回避欲求との関連を検討し、拒否回避欲求が高まると社会的不安傾向が強くなるのに対し、賞賛獲得欲求はその逆で、社会的不安傾向が抑制されることを明らかにしている。つまり、何を目的に自己呈示するかということが、対人不安に重要な意味を持っていることが示され、自己呈示欲求を高める要因を区別せずに列挙している Leary のモデルの限界を示唆している。

しかし Leary のモデルを支持する研究は多くある。どちらの欲求が対人不安に影響を与えるかは、状況によるのではないかと考えられる。佐々木ら (2001) の研究で用いられた対人不安尺度は1因子構造であり、様々な状況の相互作用における不安を測る尺度であった。このことから、状況を分けて検討することには意味があると思われる。

### 2. 自己呈示の主観的確率について

自分の望んだ評価や反応をどのようにしたら他者から得られるかが分かっている、それが実際にできるかどうかは疑わしいということがある。したがって自己呈示の主観的確率も二つの側面から考える必要があ

る。

他者に望ましい印象を与えているかどうかの確信が持てないことの要因は、「そのような状況でどのような自己呈示が効果的か分からない」か「適切な反応の仕方が分からない」かのいずれかから成る。これは、自己呈示が適切であるか否かを状況や他者の行動観察に基づいて判断し、状況に合致するよう自分の行動をコントロールする能力であるセルフ・モニタリングに基づいており、主観的確率はセルフ・モニタリングとして測定できる。

Leary (1990) はセルフ・モニタリングを用いて対人不安を説明した。つまり、この理論によると、セルフ・モニタリングの高い人は対人不安が低く、セルフ・モニタリングの低い人は対人不安が高いということになるが、必ずしもその結果は得られていない (Leary, 1990)。同じような矛盾は他の研究からもみられる。適切な態度についての手がかりに敏感であるために状況を的確に捉えることができず状況に応じた対人行動ができる事を証明した研究 (Riggio, 1986; 後藤, 2001 など) と、適切な態度についての手がかりに敏感であることが対人不安を感じる原因となっていることを示す研究 (相川, 1991; 榎野, 1988; Riggio, 1986 栗林ら, 1995 など) とがあり、適切な行動や自己呈示のための手がかりに敏感であることは、対人不安に対して相反する議論が行われていることになる。

Leary (1990) によれば、対人場面の中で他者のふるまいに敏感になることは、当該の状況の中で自分がどのように行動すればよいかを決定するための情報をもたらすことになる。しかしそのような情報収集をしても適切な行動ができない場合には、自己呈示効率は低下し対人不安が生じると考えられる。このことから、適切な態度についての手がかりに敏感であることは、対人不安に対して促進的な影響と抑制的な影響を持つといえる。適切な態度についての手がかりに敏感であることが対人不安にどのような影響を与えるかは、状況によるのではないかと考えられる。

また、自己呈示欲求と自己呈示の主観的確率間の関係について述べられている研究はみられない。自己呈示欲求と自己呈示の主観的確率が相互に影響を与え合い、状況によって対人不安を促進する、または抑制することは十分に考えられることである。両者の関係を明らかにすることは、より対人不安の解明につながると思われる。

さらに、日本人と欧米人の対人不安の違いとして、

日本人はフォーマルな評価場面ではなくインフォーマルな雑談場面で、また初対面の状況ではなく「半知り」の状況で不安が起りやすいといわれていることと、他者からの評価懸念だけでなく、他者に不快な感じを与えて迷惑をかけることへの懸念に伴う不安という側面があることなどがあげられる。丹野 (2001) は、日本人独特の対人不安に Leary の理論がそぐわないところもあると指摘している。この日本人特有の対人不安のメカニズムについても、明らかにする必要があると思われる。

直面した対人状況によって、自己呈示欲求と自己呈示の主観的確率と対人不安の関係には違いがあることが予想される。本研究では、自己呈示欲求および主観的確率の認知が対人不安に与える効果を対人状況別に検討し、その違いを明らかにすることを目的とする。

なお、一般に、対人不安意識は青年期が最も高いとされており、対人不安を扱う研究の多くが、青年期を対象に行われている。また、男子に比べて女子は、対人関係を重視する傾向にあるといわれている (齊藤・中村, 1987)。したがって、女子青年の対人不安について検討することは意義のあることと思われる。

### 3. 仮説

自己呈示欲求については、Leary (1990) が「人から認められたいという欲求が強い場合」と「人からネガティブな評価を受ける恐れが強い場合」のどちらも対人不安を引き起こすと述べていることから、賞賛獲得欲求も拒否回避欲求も対人不安を高める影響力を持つだろう。また自己呈示の主観的確率については、Leary (1990) が「どのような自己呈示が最も効果的であるかが分からない場合」と「期待通りの評価が得られるかどうか分からない場合」には対人不安を引き起こすと述べていることから、言語情報の解読能力の効力感も自己呈示行動の制御能力の効力感も対人不安を抑制する影響力を持つだろう。この一般的な対人不安は、状況の違いによって次のようになると考えられる。

#### (1) 発表・発言状況

人がたくさんいるところでの発表など、人前で何かをするという状況であり、聴衆不安尺度と相関が高い (毛利・丹野, 2001)。この状況は、他者から評価されていることが明らかであり、ポジティブな自己を示すことを目的とすると考えられるため、①賞賛獲得欲求は高いほど対人不安を促進し、②賞賛獲得欲求は拒否回避欲求よりも対人不安に影響をお

よばすだろう。③言語情報の解読能力の効力感も自己呈示行動の制御能力の効力感も対人不安を抑制する影響力を持つだろう。

#### (2) 目上状況

先生や上司、先輩などと接する状況である（毛利・丹野，2001）。報酬や罰を与える地位にいる人に対して適切な自己イメージを与えられるか否かは現実の問題として結果にはねかえってくる。Leary（1990）は、期待される結果の価値が大きければ大きいほど、人は間違いのない方法で相手に接しようと強く動機づけられると述べている。この状況では、①賞賛獲得欲求が高いほど、②拒否回避欲求が高いほど対人不安を促進するだろう。③言語情報の解読能力の効力感も自己呈示行動の制御能力の効力感も対人不安を抑制する影響力を持つだろう。

#### (3) 異性状況

異性と一緒に行ったり、話したりする状況である（毛利・丹野，2001）。Leary（1990）によると、西洋文化は男女関係をとりわけ重視しており、異性に対して適切な印象を与えた時には、性的・社会的に自分が好まれているという自己認識のフィードバックを受けやすく、このフィードバックは高い価値を持つ。このため、①賞賛獲得欲求も拒否回避欲求も対人不安を促進するだろう。自己呈示の効力感においては、②言語情報の解読能力の効力感も自己呈示行動の制御能力の効力感も対人不安を抑制する影響力を持つだろう。

#### (4) 親しくない相手状況

あまり親しくない人や嫌いな人、単なる知り合いなどと接する状況である（毛利・丹野，2001）。従来より対人恐怖症者は「半知り」を苦手とすると言われており、相手に対する過剰な配慮がなされる状況であるといえる。Leary はこのような状況での対人不安を想定していないが、間違いのない方法で相手に接しようと強く動機づけられると思われることから、①賞賛獲得欲求が高いほど、②拒否回避欲求が高いほど対人不安を促進するだろう。また、相手に対する過剰な配慮がなされると思われることから、③非言語情報の解読能力の効力感が高いほど対人不安を促進し、低いほど対人不安を抑制するだろう。④自己呈示行動の制御能力についての効力感が高いほど対人不安を抑制し、低いほど対人不安を促進するだろう。

#### (5) 会話のない状況

話の輪に入っている自分、あるいは途切れない会

話などを達成するため、「会話をしたい」のに「会話ができていない」という状況である。聴衆不安とは低い相関を持ち、他者からの否定的な評価への恐れとより密接に関連することが分かっており（毛利・丹野，2001）、日本人特有の「間」に対する不安といえる。これは、「関係」の中での自己の喪失に対する懸念や「関係」に対する過剰な配慮が起こる状況であるといえる。このような状況での対人不安も Leary は想定していないが、間違いのない方法で相手に接しようと強く動機づけられると思われることから、①賞賛獲得欲求が高いほど、②拒否回避欲求が高いほど対人不安を促進するだろう。また、「関係」に対する過剰な配慮がなされると思われることから、③非言語情報の解読能力の効力感が高いほど対人不安を促進し、低いほど対人不安を抑制するだろう。④自己呈示行動の制御能力についての効力感が高いほど対人不安を抑制し、低いほど対人不安を促進するだろう。

(6) 「発表・発言不安」と「目上不安」と「異性不安」は欧米でもよくみられる対人不安であり、Leary の理論で想定されている対人不安であるため、相関が高いだろう。「親しくない相手不安」と「会話のない不安」は日本人特有の対人不安であり、これらは同じメカニズムで生じると考えられるため、相関が高いだろう。

## 方 法

#### 〈被験者〉

調査対象者は女子大学の学生である。調査時期は2002年9月～2002年11月で、授業を利用、あるいは個人的に依頼して質問紙調査を実施した。「発表・発言状況」に150名、「目上状況」に150名、「異性状況」に160名、「親しくない相手状況」に160名、「会話のない状況」に160名の計780名（回収率86.67%）。被験者の平均年齢は19.6歳（SD=1.13；19歳～25歳）であった。

#### 〈質問紙〉

##### ①自己呈示欲求尺度

菅原（1986）によって作成された尺度を、各状況に合うように変えて用いた。他者からの評価に対する欲求を測定する。“他者から賞賛されたい（賞賛獲得）”及び“他者から拒否されたくない（拒否回避）”という欲求の強さを反映する。9項目について5件法で評定を求めた（「あてはまる」「ややあてはまる」「どち

らでもない」「ややあてはまらない」「あてはまらない」)。

### ②セルフ・モニタリング改訂尺度

Lennox & Wolfe (1984) によって作成され、辻 (1988) によって邦訳された尺度を、各状況に合うように変えて用いた。他者から発せられる「非言語的情報の認知・解読能力」と場面にふさわしい行動を呈示し制御する「自己呈示行動の制御能力」の認知を測定する。13 項目について 5 件法で評定を求めた (「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「ややあてはまらない」「あてはまらない」)。

### ③STATE ANXIETY INVENTORY (状態不安尺度)

Spielberger, Gorsuch & Lushene (1970) によって作成され、清水・今榮 (1981) によって邦訳された。一時的な不安の水準を測定する。20 項目について 4 件法で評定をもとめた (「全くそうでない」「いくぶんそうである」「ほぼそうである」「全くそうである」)。

### ④状況別対人不安尺度

毛利・丹野 (2001) によって作成された。状況による対人不安の違いを測定する。「発表・発言不安」「親しくはない相手不安」「異性への不安」「会話のない不安」「目上への不安」の下位尺度からなる。30 項目について 5 件法で評定を求めた (「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「ややあてはまらない」「あてはまらない」)。

<手続き>

まず最初に、下記のような具体的な対人場面を示し、その状況におかれた事をイメージして質問紙①から質問紙③の回答を求めた。次に、普段の対人不安について質問紙④の回答を求めた。一人一状況で質問紙調査を実施した (発表・発言状況：授業中、米国同時多発テロについて皆の前で意見を述べる、目上状況：アルバイトの予定日に別の予定を入れてしまい上司にアルバイトを休む事を伝えるに行く、異性状況：サークルに行くと、まだ異性部員一人しか来ていなかった、親しくない相手状況：ホームで電車を待っていると、親しくないクラスメイトに話しかけられた、会話のない状況：友人と話をしている時、よく知らない事について意見を求められ、問があいた)。

## 結 果

本研究では、対人不安を『状態不安尺度』と『状況別対人不安尺度』で測定した。前者は、個人がおかれた対人状況によって変化する一時的で主観的、意識的

に認知される緊張や気づかいなどの情緒状態を測定している。後者は、比較的安定した性格特徴であり、不安傾向の個人差である特性不安を測定している。特性不安の高い人は低い人よりも状態不安を喚起する。以下の記述では、『状態不安尺度』で測定されたものを「状態不安」、『状況別対人不安尺度』で測定されたものを「特性不安」と呼ぶ。また、「対人不安」は両者を指す。

自己呈示欲求尺度はその内容により「賞賛獲得欲求因子」と「拒否回避欲求因子」に分け、セルフ・モニタリング尺度はその内容により「非言語的情報の認知・解読能力因子 (以下「解読能力」と表記)」と「自己呈示行動の制御能力因子 (以下「制御能力」と表記)」に分けた。状況別対人不安尺度については、主因子法による因子抽出とバリマックス回転を用いて因子分析を行った。その後、各状況ごとにも同様の因子分析を行った。

各状況での状態不安尺度について、対象者の評定得点を合計した値を各状況の各尺度得点とした (Table 1)。

## 1. 相関分析

状況別対人不安尺度について、尺度間の相関係数を算出し、各状況の不安がどのような影響関係にあるのかを検討した (Table 2)。

どの尺度間にも有意な中程度以上の正の相関がみられたが、発表・発言不安と目上不安、親しくない相手不安と会話のない状況不安の間にはやや強い正の相関がみられた。発表・発言不安と目上不安、親しくない相手不安と会話のない状況不安はそれぞれ深い関わりを持つことが示唆され、異性不安を除き仮説 (6) を支持するものといえる。

## 2. パス解析によるモデルの検討

Amos 4.0 を用いて共分散構造分析のパス解析を行い、仮説に従って各状況ごとにモデルの作成を試みた (Figure 1-1 ~ 1-5)。

Table 1 各状況における状態不安尺度得点

	N	平均値	標準偏差
発表・発言状況	150	58.39	10.21
目上状況	150	56.91	9.99
異性状況	160	51.74	7.68
親しくない相手状況	160	50.97	9.14
会話のない状況	160	52.54	8.61

Table 2 状況別対人不安尺度の尺度間相関係数 (Pearson)

	発表・発言不安	目上不安	異性不安	親しくない相手不安	会話のない状況不安
発表・発言不安	1.00	0.62**	0.51**	0.56**	0.48**
目上不安		1.00	0.55**	0.58**	0.43**
異性不安			1.00	0.58**	0.49**
親しくない相手不安				1.00	0.61**
会話のない状況不安					1.00

\*\*p<.01

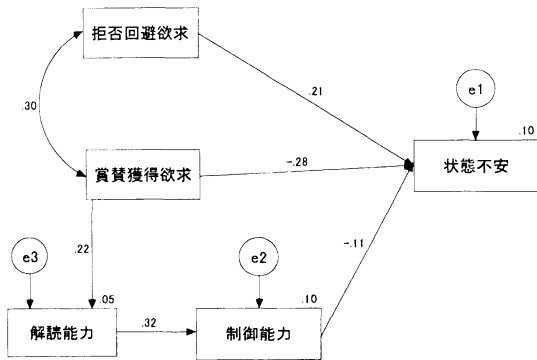


Figure 1-1 「発表・発言状況」におけるパス解析モデル

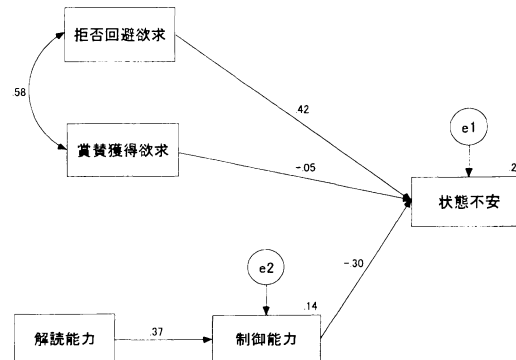


Figure 1-2 目上状況におけるパス解析モデル

(1) 発表・発言状況

仮説に従いモデルを作成したところ適合度が低かったため、「解読能力」から「状態不安」へのパスを削除し、「制御能力」へのパスを加えた。また、「賞賛獲得欲求」から「解読能力」へのパスを加えて再度モデルを構成した。このモデルにおけるカイ2乗値は8.91, その有意確率は0.26であり, 適合度は良いといえる。また, GFI値は0.97, AGFI値は0.89, RMSEA値は0.11であった。従って, このモデル全体の適合性は十分であるといえる。

このモデルより次のことがいえる。

- ①発表・発言状況での「状態不安」を有意に規定するのは、「賞賛獲得欲求」・「拒否獲得欲求」・「制御能力」である。
- ②「賞賛獲得欲求」が低いほど、「拒否回避欲求」が高いほど、「制御能力」が低いほど、発表・発言状況での「状態不安」は高められる。
- ③「解読能力」は「状態不安」へ直接の影響を持たないが、「解読能力」が高いほど「制御能力」が有意に高くなるという点と、「賞賛獲得欲求」が高いほど「解読能力」が有意に高くなるという点から、「解読能力」が高いと発表・発言状況での対人不安は低くなるといえる。

以上の事から, 仮説(1) ①「賞賛獲得欲求は高いほど対人不安を促進するだろう」は支持されず, ②「賞賛獲得欲求が拒否回避欲求よりも対人不安に影響

をおよぼすだろう」も支持されず, ③「非言語情報の解読能力の効力感も自己呈示行動の制御能力の効力感も対人不安を抑制する影響力を持つだろう」は支持された。

(2) 目上状況

仮説に従いモデルを作成したところ適合度が低かったため、「解読能力」から「状態不安」へのパスを削除し、「制御能力」へのパスを加えて再度モデルを構成した。このモデルにおけるカイ2乗値は4.59, その有意確率は0.47であり, 適合度は良いといえる。また, GFI値は0.99, AGFI値は0.96, RMSEA値は0.00であった。従って, このモデル全体の適合性は十分であるといえる。

このモデルより次のことがいえる。

- ①目上状況での「状態不安」を有意に規定するのは、「拒否回避欲求」・「制御能力」である。「賞賛獲得欲求」は有意な影響力を持たない。
- ②「拒否回避欲求」が高いほど、「制御能力」が低いほど、目上状況での「状態不安」は高められる。
- ③「解読能力」は「状態不安」へも特性不安へも直接の影響を持たないが、「解読能力」が高いほど「制御能力」が有意に高くなるという点から、「解読能力」が高いと目上状況での対人不安は低くなるといえる。

以上の事から, 仮説(2) ①「賞賛獲得欲求が高い

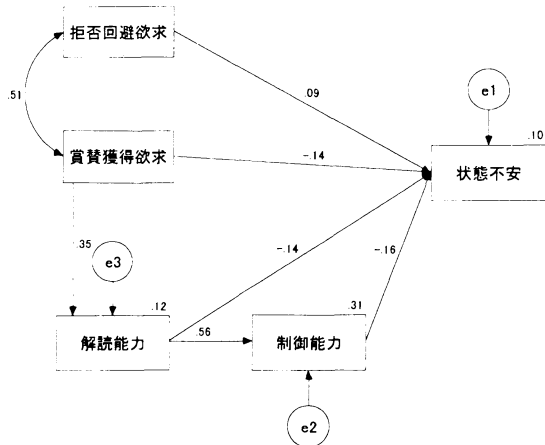


Figure 1-3 異性状況におけるパス解析モデル

ほど対人不安を促進するだろう」は支持されず、②「拒否回避欲求が高いほど対人不安を促進するだろう」は支持された。③「言語情報の解読能力の効力感も自己呈示行動の制御能力の効力感も対人不安を抑制する影響力を持つだろう」は支持された。

### (3) 異性状況

仮説に従いモデルを作成したところ適合度が低かったため、「賞賛獲得欲求」から「解読能力」へのパスと「解読能力」から「制御能力」へのパスを加えて再度モデルを構成した。このモデルにおけるカイ2乗値は1.51、その有意確率は0.67であり、適合度は良いといえる。また、GFI値は0.99、AGFI値は0.98、RMSEA値は0.00であった。従って、このモデル全体の適合性は十分であるといえる。

このモデルより次のことがいえる。

- ①異性状況での「状態不安」を有意に規定するのは、「賞賛獲得欲求」・「解読能力」・「制御能力」である。「拒否回避欲求」は有意な影響力を持たない。
- ②「賞賛獲得欲求」が低いほど、「解読能力」が低いほど、「制御能力」が低いほど、異性状況での「状態不安」は高められる。
- ③「解読能力」はまた、「賞賛獲得欲求」が高いほど「解読能力」が有意に高くなり、「解読能力」が高いほど「制御能力」が有意に高くなる

以上の事から、仮説(3)①「賞賛獲得欲求は高いほど対人不安を促進するだろう」は支持されなかったが、仮説(3)②「拒否回避欲求は高いほど対人不安を促進するだろう」は支持された。また、仮説(3)①「自己呈示欲求が高い影響力を持つことはないだろう」は拒否回避欲求についてのみ支持された。②「言語情報の解読能力の効力感も自己呈示行動の制御能力

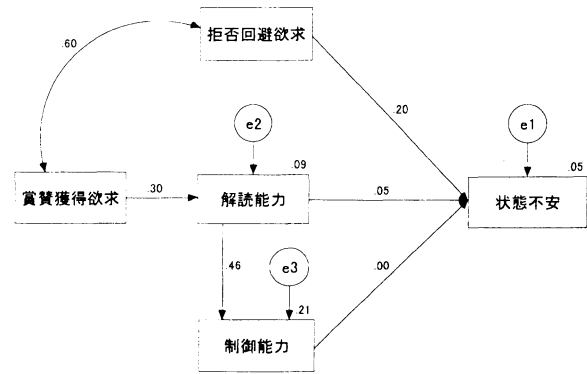


Figure 1-4 親しくない相手状況におけるパス解析モデル

の効力感も対人不安を抑制する影響力を持つだろう」は支持された。

### (4) 親しくない相手状況

仮説に従いモデルを作成したところ適合度が低かったため、「賞賛獲得欲求」から「状態不安」へのパスを削除し、「賞賛獲得欲求」から「解読能力」へのパスを加えた。さらに、「解読能力」から「制御能力」へのパスを加えて再度モデルを構成した。このモデルにおけるカイ2乗値は2.46、その有意確率は0.65であり、適合度は良いといえる。また、GFI値は0.99、AGFI値は0.97、RMSEA値は0.00であった。従って、このモデル全体の適合性は十分であるといえる。

このモデルより次のことがいえる。

- ①親しくない相手状況での「状態不安」を規定するのは、「拒否回避欲求」のみであり、それ以外の要因は影響力を持たない。
- ②「拒否回避欲求」が高いほど、親しくない相手状況での「状態不安」は高められる。

以上の事から、仮説(4)①「賞賛獲得欲求が高いほど対人不安を促進するだろう」は支持されず、②「拒否回避欲求が高いほど対人不安を促進するだろう」は支持された。また③「非言語情報の解読能力の効力感が高いほど対人不安を促進し、低いほど対人不安を抑制するだろう」は支持されず、④「自己呈示行動の制御能力についての効力感が高いほど対人不安を抑制し、低いほど対人不安を促進するだろう」は支持されなかった。

### (5) 会話のない状況

仮説に従いモデルを作成したところ適合度が低かったため、「解読能力」から「制御能力」へのパスを加えて再度モデルを構成した。このモデルにおけるカイ

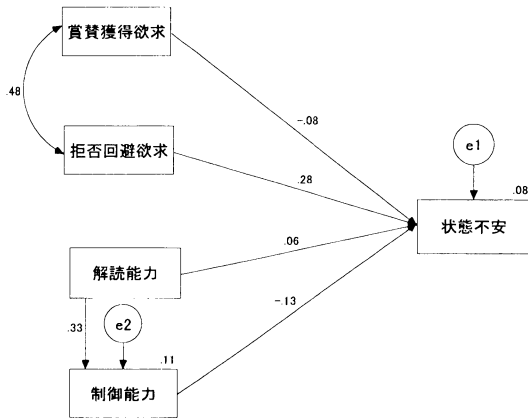


Figure 1-5 会話のない状況におけるパス解析モデル

2乗値は 1.51, その確率は 0.67 であり, 適合度は良いといえる。また, GFI 値は 0.99, AGFI 値は 0.98, RMSEA 値は 0.00 であった。従って, このモデル全体の適合性は十分であるといえる。

このモデルより次のことがいえる。

- ①会話のない相手状況での「状態不安」を有意に規定するのは、「拒否回避欲求」・「制御能力」であり、それ以外の要因は影響力を持たない。
- ②「拒否回避欲求」が高いほど、「制御能力」が低いほど、会話のない状況での「状態不安」は高められる。

以上のことから、仮説 (5) ①「賞賛獲得欲求が高いほど対人不安を促進するだろう」は支持されず②「拒否回避欲求は高いほど対人不安を促進するだろう」は支持された。また、③「非言語情報の解読能力の効力感が高いほど対人不安を促進し、低いほど対人不安を抑制するだろう」は支持されず④「自己呈示行動の制御能力についての効力感が高いほど対人不安を抑制し、低いほど対人不安を促進するだろう」は支持された。

## 考 察

本研究では、自己呈示理論による対人不安へのアプローチにおいて、自己呈示欲求を「賞賛獲得欲求」と「拒否回避欲求」の二側面から、また自己呈示の主観的確率をセルフ・モニタリングの「非言語的情報の認知・解読能力」と「自己呈示行動の制御能力」の二側面から5つの状況別に検討し、共分散構造分析を行なった。その結果、当初仮定したモデルとは異なるが、適合性のあるモデルを構成する事ができた。これによって、対人状況によって対人不安を高める要因には違

いがあることが示された。

### 1. 自己呈示欲求と対人不安

拒否回避欲求については、「異性状況」以外のどの対人状況においても対人不安を促進する働きが明らかにされた。しかし、賞賛獲得欲求については、「発表・発言状況」と「異性状況」では対人不安を抑制し、「目上状況」「親しくない相手状況」「会話のない状況」では対人不安とは無関係であった。

拒否回避欲求についての結果は、Leary のモデルを支持する。しかし賞賛獲得欲求についての結果から、賞賛獲得欲求が単独で不安を高める可能性は低いように思われる。また「発表・発言状況」と「異性状況」においては、賞賛獲得欲求が拒否回避欲求と拮抗して対人不安に及ぼす拒否回避欲求の影響を弱める働きを持つとする佐々木ら (2001) の結果と一致した。さらに「異性状況」においては、恋愛状況における告白行動に対して賞賛獲得欲求は促進的な影響を与えるが拒否回避欲求は抑制的な影響を与えるとする菅原 (2000) と類似しているといえる。

これらのことから、対人不安とは他者からの否定的な評価に対する不安であり、肯定的な評価が得られないことへの不安ではないということに加え、「発表・発言状況」と「異性状況」においては、自己の存在を主張し、相手の関心を自分に集めようとする動機づけはむしろ不安を抑制するといえる。

### 2. 自己呈示の主観的確率 (セルフ・モニタリング) と対人不安

自己呈示行動の制御能力の効力感とは、多くの対人状況において対人不安を抑制する働きが明らかにされ、Leary のモデルを支持したが、「親しくない相手状況」においてのみ Leary のモデルを支持しなかった。非言語的情報の認知・解読能力の効力感においては、「異性状況」では対人不安を抑制する。「親しくない相手状況」と「会話のない状況」では対人不安を有意ではないが促進する傾向がみられた。「発表・発言状況」と「目上状況」では対人不安とは直接の影響をもたないが、解読能力が制御能力を促進することから、制御能力の効力感を高めると考えられた。このことから、「発表・発言状況」と「目上状況」と「異性状況」では、非言語的情報の認知・解読能力の効力感が高いと対人不安は低くなり、「親しくない相手状況」と「会話のない状況」では非言語的情報の認知・解読能力の効力感が高いと対人不安は高くなる可能性を示唆

する。非言語情報の認知・解読能力の効力感についての結果は、「発表・発言状況」と「目上状況」と「異性状況」においては Leary のモデルを支持するが、「親しくない相手状況」と「会話のない状況」においては Leary のモデルを支持するとはいえない。同じセルフ・モニタリング改訂尺度を用いて行われた諸井 (1997) の研究でも、解読能力が自己呈示不安や視線恐怖に対して、有意な正の規定因となるという結果が得られている。

Snyder (1987) は、自分の行動の社会的適切さへの関心から他者の行動に敏感になり、自分の行動を統制する人間の傾向をセルフ・モニタリングと命名した。Snyder によれば、対人場面の中で他者のふるまいに敏感になることは、当該の状況の中で自分がどのように行動すれば良いかを決定するための情報をもたらすことになる。「発表・発言状況」・「目上状況」・「異性状況」においては、相手の情報を解読した後、個人的経験から得られた感情や思考と照合して判断し、他者の感情に影響を受けることなく自己の行動をコントロールすると解釈できるだろう。逆にいえば、このような状況では、個人の感情や思考によってしか判断できないのであれば、どのような行動が適切なのか分からなくなり、対人不安を感じるようになるのであろう。一方、「親しくない相手状況」・「会話のない状況」においては、他者のふるまいに対する過度の敏感さは、情報が得られても行動のコントロールができない場合、自分の行動が相手にどのような印象を形成するかに関する肯定的確信を持たなくなるだろうし、「場」に調和していない自己が浮き彫りにもなると解釈できるだろう。それが対人不安につながると考えられる。

また、セルフ・モニタリングは主観的な能力であり、実際の能力がどうかは定かではない。後藤 (2001) が、「対人不安が高い人は、他者が表出する反応やコミュニケーションの結果を正確に解読することができず、他者からの認知を自己否定的な方向に歪めて推測するため、その否定的な推測が否定的な自己認知の確証へと導く」と指摘するように、自己呈示行動の制御能力を伴わない非言語情報の認知・解読能力の効力感、歪められた否定的な情報である可能性も考えられる。

### 3. 日本人の対人不安と自己呈示の関係

それぞれの状況の状態不安を比較すると、高い順に、「発表・発言状況」での不安>「目上状況」での不安>「会話のない状況」での不安>「異性状況」での

不安>「親しくない相手状況」での不安”の傾向があった。

「発表・発言状況」では、発表の場面の多くは相手からの評価を受けるものであり、その評価は自分の自尊心や価値観に影響を与える。相手から否定的な評価を受けるだろうという予感があれば、拒否回避欲求が高まりやすくなるだろう。さらに、濱口 (1998) は、「目的合理的志向対価値志向という相対立する構図の中で、後者の優位性が目立つと、それが欲求抑制的に働くことになる」と述べている。これを「発表・発言状況」に当てはめて解釈すると、自己の存在を主張して相手の関心を自分に集めようと動機づけられていても、発表する内容が相手の価値基準で評価される場合には、その欲求は抑制されてしまう。以上の事から、「発表・発言状況」では拒否回避欲求は喚起されやすく、賞賛獲得欲求は抑制されやすいと考えられ、賞賛獲得欲求が抑制されれば解読能力の効力感が高められず、さらに制御能力の効力感も高まらないため、対人不安を感じやすくなると考えられるので、この観点からの今後の検討が必要である。

「目上状況」もまた、多くは相手からの評価を受けるものである。「発表・発言状況」と高い相関を持つことから、両者は類似していると考えられる。しかし「目上状況」では、モデルより自己呈示欲求と自己呈示の効力感の間に関連はなく、「発表・発言状況」のような相乗効果は生じないと考えられ、「発表・発言状況」よりは不安が生じにくいと思われるので、この観点からの今後の検討が必要である。

「会話のない状況」と「親しくない相手状況」では、「場」の雰囲気敏感でなければならない。長谷川 (1993) が「日本人の自己監督 (セルフ・モニタリング) とは、自己自身の姿を「場」との調和において眺めているという構造の事であり、自己と「場」との不調和がないかどうかを的確に判断し、もし不調和があれば、自分自身を改善することによってそれを取り除くことである」と述べているように、解読能力が働き、制御能力も働けば、拒否されるかもしれない可能性は低くなる。しかし、解読能力が働き、制御能力が働かなければ、拒否回避欲求は高くなることが予想され、対人不安を引き起こす。これを「会話のない状況」に当てはめて解釈すると、「間」を解消するために相手が発する情報を読み取り、話を合わせていくことができれば、相手から受ける評価は高くなることが予想され、拒否回避欲求も下がる。反対に相手に合わせられない場合、相手への過剰な配慮が生じ、相手の



自分への否定的評価をも読み取ってしまい、拒否回避欲求がますます高まっていく。以上のように考えると、拒否回避欲求は自己呈示の制御能力の効力感があるか否かによる二次的なものと考えられるので、発表・発言状況や目上状況よりも対人不安が生じにくいと考えられる。「親しくない相手状況」でも同様なことが起こると考えられるが、本研究で設定された状況で不安を感じるのは、対人恐怖という病理のレベルであって、一般的に不安を感じる状況ではないと思われる。そのため、「親しくない相手状況」での不安が最も低かったのだろうと考えられる。

「異性状況」での対人不安については、本研究で対象にした女子大学生は、異性不安は他の対人不安に比べると喚起されにくかった。Leary (1990) は異性不安について、「男女関係、性的魅力、異性愛を重視する社会では、異性は価値ある社会的報酬を与える地位にいる。異性に対して適切な印象を与えた時には、性的・社会的に自分が好まれているという自己認識のフィードバックを受けやすく、しかも、このフィードバックは西洋文化では高い価値を持つ。西洋文化は、男女関係をとりわけ重視しているので、異性に良い印象を与えようと人々は強く動機づけられている。そのため、異性状況は対人不安を促し増大させる最も一般的な相互作用である」と説明しているが、これは本研究で対象とした女子大学生には当てはまらなかった。このことから、日本文化と西洋文化の対人不安は異なったものであることが示唆できる。しかし、本研究は女子大学の学生を対象にした結果である。共学の女子大生、男子学生、世代の違う対象ではどうか、さらなる比較研究が必要である。

#### 4. 今後の課題

「目上状況」と「親しくない相手状況」と「発言・発表状況」は状況の設定が不適切であったことが反省点としてあげられる。本研究で設定した「目上状況」は、明らかに自分に非がある状況であった。目上不安とは、必ずしも自分に非がある状況とは限らないものであり、この状況では、自己呈示欲求や自己呈示の主観的確率だけでない感情も生じていた可能性があると思われる。「親しくない相手状況」は、先にも述べたが、病理レベルで不安を感じる状況であり、一般的に不安を感じる状況ではなかった。また、「発言・発表状況」で扱ったテーマは社会情勢から考えると適切ではなく、対人不安以外の情動も生じる可能性が高いだろう。これらの対人不安については、状況設定の再吟

味が必要である。

最後に、本研究の結果から、対人不安の治療について考察を試みる。まず、対人状況により、対人不安が生じるメカニズムは多少違っているの、どんな状況で不安を感じやすいかを明確にする必要がある。次に、「好かれない」という感情を持つように導くこと、特に、「発表・発言不安」と「異性不安」の低減のためには、他者の関心をひきつけようという方略へ患者を導くことは効果的である。また、対人不安の抑制のために、様々な状況に合わせて行動を取る技能を、ソーシャルスキルトレーニングなどによって身につけることが重要である。その際、他者のふるまいに対して過度に敏感になることは、他者に否定的印象が形成されてはいないか懸念させることにもなるので、特に「関係」を重視する状況で対人不安を感じやすい患者へは注意しなければならない。

#### 引用文献

- Bieling, P. J., Beck, A. T. & Brown, G. K. 2000 The Sociotropy-Autonomy Scale: Structure and Implications *Cognitive Therapy and Research* 24(6) 763-780
- 後藤 学 2001 シャイネスに関する社会心理学的研究とその展望 対人社会心理学研究 1 81-91
- 濱口恵俊 1998 日本研究原論-「関係体」としての日本人と日本社会 有斐閣
- 長谷川美千子 1993 自己のかたち-罪の文化と恥の文化 濱口恵俊(編) 日本型モデルとは何か-国際化時代におけるメリットとデメリット 新曜社
- 榎野 潤 1988 社会的技能研究の統合的アプローチ(1)-SSIの信頼性と妥当性の検討-関西大学大学院『人間科学』31 1-16
- 栗林克匡・相川 充 1995 シャイネスが対人認知に及ぼす効果 実験社会心理学研究 35(1)号 49-55
- 諸井克英 1997 セルフ・モニタリングと対人不安との関係におよぼす認知欲求の効果:女子青年の場合 静岡大学人文学部 48(1) 31-67
- 毛利伊吹・丹野義彦 2001 状況別対人不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 健康心理学研究 14(1) 23-31
- Leary, M. R. 1983 Social Anxiousness: The Construct and Its Measurement *Journal of Personality Assessment* 47(1) 66-75
- Leary, M. R. 1983 SOCIAL ANXIETY Social, Personality, and Clinical Perspectives 生和秀敏(監訳) 1990 対人不安 北大路書房
- Riggio, R. E., 1986, Assessment of Basic Social Skills, *Journal of Personality & Social Psychology*, 51, 649-660
- 佐々木淳・菅原健介・丹野義彦 2001 対人不安における自己呈示欲求について-賞賛獲得欲求と拒否回避欲求との比較から 性格心理学研究 9(2) 142-143
- 斉藤和志・高村雅彦 1987 対人的志向性尺度作成の試

- み 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科) 34 97-109
- Sharkey, W. F & Singelis, T. M 1995 Embarrassability and Self-Construal: A theoretical integration *Personality and Individual Differences* 19(6) 919-926
- 清水秀美・今栄国靖 1981 STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版(大学生用)の作成 教育心理学研究 29(4) 348-353
- Snyder, Mark 1987 Public appearances private realities W. H. Freeman and Company
- 菅原健介 1986 称賛されたい欲求と拒否されたくない欲求-公的自己意識の強い人に見られる2つの欲求について 心理学研究 57 134-140
- 菅原健介 2000 恋愛における告白行動の抑制と促進に関わる要因-異性不安の心理的メカニズムに関する一考察 日本社会心理学会第41回大会発表論文集 230-231
- 丹野義彦 2001 エビデンス臨床心理学 日本評論社
- 辻平治郎 1988 セルフ・モニタリング尺度の因子構造と自己呈示理論の提案 甲南女子大学人間科学年報 13 51-65